（４）①様式第４号－２（報告書）

NITS カフェ報告書	実施機関名・連携機関名 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）
※機構記入欄 No. ：　-	セミナー名：【NITS カフェ in 弘前】 飾らないことばで参ります　ー子どものために対話する大人の集いー

テーマ：「コミュニケーション能力」って何だろう？

近年重視されている「コミュニケーション能力」。学校では、「コミュニケーション能力」を育むための様々な取組が行われているが、そもそも「コミュニケーション能力」とは、具体的にどんな力なのか議論されることは少ないのではないだろうか。実のところ、教員一人一人が、子どもたちのどんな姿をもって「コミュニケーション能力」が高い（または低い）と判断しているのかは、案外違っているのかもしれない。そんなことを切り口に、子どもの姿を元にして意見交換することにより、教育への思いと情熱を交流させたいと考えた。

また、青森県内一般教員と県教育委員会関係者、そして教職大学院生及び教員とで少人数の班を構成し、教育に対する思いを交流することにより、教員同士のネットワークを形成する場としながら、青森県が直面する教育課題の解決を目指した教育実践を創造し、リードしていく教員の養成につながることを期待するものとした。

内容：

【開会行事・趣旨説明】

はじめに、参加者がお互いに自由に発言でき、様々な意見に触れることができるよう、ファシリテーターの下山達彦氏（弘前大学教職大学院生）から哲学対話を成立させるため、スライドによる説明があった。

【交流】

「コミュニケーション能力」をテーマに、一般教員、県教育委員会関係者、教職大学院院生及び教員が混ざるかたちで少人数の班を構成し、自由に対話した。途中、テーマに関する情報提供をはさみ、メンバーを変えてさらに交流した。

【シェアリング】

各自の印象に残ったキーワードをもとに、本日まだ交流していない者同士２～３名でシェアリングした。この会一番の盛り上がりを見せたため、さらにメンバーを変えシェアリングする時間を設けた。

【閉会行事】

「“すべては子どもたちのために”と思ってやっていることも、一度立ち止まって考えてみることも必要ではないか。そのためにも、対話することを続けていきたい。」という下山氏の言葉で締めくくられた。

【参加人数】 青森県内教員５名、青森県総合学校教育センター関係者２名、青森県教育委員会３名、弘前大学教職大学院関係者 24 名（教員 10 名、院生 14 名）　合計 34 名

成果：

多くの参加者から、立場を越えて、自由に素直に語りあえる場で、様々な考え方や意見を聞くことが出来、自分の考えが深まったという肯定的な意見が聞かれた。以下は、アンケートに寄せられた感想や意見の一部である。

- いろいろな立場の方と一つのテーマで話すことが面白かった。職場でも固定概念にとらわれずに話せたならなと思いました。（特別支援学校教員）
- エネルギーをもらえたので、次回は周囲を誘って、参加したい。（教育行政機関）
- 年齢や立場の違う方々と自由に話すことは日常でかなり少なくなっていると思う。このような会で魂を自由に解放することで、また自分の在りようを考えることができ、大変感謝している。あっという間でした。（その他）
- 大学院生が主体となって企画している点が良い。研修を自らの手で作り上げることで、協働的な意義がより深く、醸成されていく時間を共有できた。（教育行政機関）
- 教員、行政、院生、大学教員が、壁なく、自由に交流する、無理に結論を出さない場の設定がよいと思いました。企画してくださる方々のお蔭で教育にかかわる柔らかなネットワークが青森で生まれていくと感じています。（教職大学院教員）

アイディアや工夫したこと：

①哲学対話を前提としたこと。（サイコロジカル・セーフティを確保し、参加者がリラックスした状態で参加できるよう配慮した）

②年齢や立場の異なるもの同士でグループ編成したこと。（ネットワークの形成の他、様々な意見に出会えるよう配慮した）

③参加者の様子やその場の雰囲気を見ながら、交流時間やシェアリングの方法を設定したこと。（参加者が思う存分話せるよう配慮した）

④テーマに関する情報提供を休憩前に行ったこと。（休憩中も参加者同士の交流が盛んに行われていた）

⑤申込期限を設けず、当日参加も可としたこと。（実際、前日や当日にも参加申込みがあった）

＜写真・図など＞

交流の様子　何を話してもいい、安心できる雰囲気の中で、活発な意見交流がなされた。

シェアリングの様子　印象に残ったキーワードをもとにシェアリング。この会一番の盛り上がりを見せた。